

『ライ麦畑でつかまえて』における親子間対立 ——進化論批評的解釈——

持 留 浩 二

序論

J・D・サリンジャー (J. D. Salinger) の『ライ麦畑でつかまえて』 (*The Catcher in the Rye*) を解釈する際、主人公ホールデン・コールフィールドの親子問題というのは決して避けて通ることの出来ない問題である。以前私は、『ライ麦畑』の中心テーマは若者の自立の問題であり、この物語は、親の世界から自立しなければならない時期が来ているものの、独り立ちする恐怖から自立に踏み込めない若者の、自立しなければならないという認識へといたる物語であると解釈していた。

このようなテーマを扱っているため、『ライ麦畑』の中には若者の繊細な心理描写が随所に見られる。特に注目すべきは親子間の問題である。かつては心理学的に親子間の問題を論じる際には、フロイト (Sigmund Freud) のエディプス・コンプレックスなどが随分参照されたものである。私はかつてフロイトの弟子であった C・G・ユング (C. G. Jung) の心理学を頼りに『ライ麦畑』を解釈していた。

しかし比較的新しい心理学の流れを形作っている進化心理学は親子間の問題について生物学的な観点からかなり説得力ある理論を提示している。有名な進化心理学者であるスティーブン・ピンカー (Steven Pinker) はエディプス・コンプレックスに対してかなりの説得力をもって反論している。では『ライ麦畑』を進化心理学的視点から見ると、以前には見えなかったものが見えてくるのではないだろうか。本論文では『ライ麦畑』における親子間対立の問題を進

化心理学的観点から考察し、そこに新しく見えてくるものを明らかにし、またなぜ若者がこの作品に魅かれるのかということを考えてみたい。

I

チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の進化論をさらに敷衍したりチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) は『利己的な遺伝子』(*The Selfish Gene*) の中で、我々人間の主人ともいうべき存在は、実は我々自身ではなく我々の遺伝子であることを明らかにした。我々人間は遺伝子が操る乗り物 (vehicle) に過ぎず、主人である遺伝子の目的は自らのコピーを出来る限り多く後世に残すことなのである。そのためにしなければならないことは二つ、生存と繁殖であり、遺伝子は乗り物である我々を操って、その二つの点で我々が他の個体よりも有利になるように進化させてきたわけである。そして今、ジョセフ・キャロル (Joseph Carroll) やデイヴィッド・バラシュ (David Barash) とナニーユ・バラシュ (Nanelle Barash) といった文学の研究者によって進化心理学を文学研究に応用しようという動きが起きている。

私自身はもともと精神分析に興味があったため、『ライ麦畑』についてもユング心理学的観点から解釈していた。『ライ麦畑』で大きなテーマとなっているのは若者の自立の問題だと考えていたので、ユング心理学の独創的な考えである「元型」という概念を用いて、『ライ麦畑』に描かれているのは、解放されようともがいている自我意識と自我を呑み込もうとするグレートマザーの元型との間の葛藤であると結論づけていた。そしてサリンジャーの作品の中でも珍しくこの作品には、その葛藤に勝利し、大人の世界へと解放されていく自我の姿が描かれているように思われた。この作品を今なお多くの若者が読んでるのは、そこに大人へと成長する貴重なプロセスが描かれているからだとは私と考えた。これを手本として若者はいかに大人に成長していけばいいのかを学んでいるのだと。

しかしそのような解釈をした後でも何かすっきりしないものを持ち続けた。というのも、この小説のエンディングが読者に与える印象にはどうもはっ

きりしないところがあるからだ。主人公の若者が大人へと成長できたという印象は強く残るのであるが、そうではない逆の解釈を許すようなところもある。具体的に言うと、この作品は主人公ホールデンが自ら語っているという一人称の物語形式をとっているのであるが、最終章で実は彼がその物語を病院で精神分析医に向かって話しているということが分かるのである。「多くの人たちが、特にここにいるこの精神分析医の男がそうなんだけど、次の9月に学校に戻ったらちゃんと頑張れるかって絶えず僕に訊いてくるんだ (Salinger 276)」この描写はそのまま受け取ると何とも救いのない物語を暗示したものとも受け取れる。

しかし『ライ麦畑』を最後まで読んだほとんどの読者は肯定的な印象を受けずである。エンディングの少し前の、ホールデンが雨にぬれながらメリーゴーランドに乗っているフィービーを見ている時に「落ちるときは落ちるんだ」と悟る場面は、間違いなく彼の中で古い自我が壊れ、新しい自我として生まれ変わり成長する描写だと受け取って間違いはないだろうからだ。

Then the carousel started, . . . All the kids kept trying to grab for the gold ring, and so was old Phoebe, and I was sort of afraid she'd fall off the goddam horse, but I didn't say anything or do anything. The thing with kids is, if they want to grab for the gold ring, you have to let them do it, and not say anything. If they fall off, they fall off, but it's bad if you say anything to them. (Salinger 218)

それからメリーゴーランドが動き出したんだ……子供たちはみんな金色の輪を掴もうとしている。フィービーもね。それを見て彼女がああ馬から落ちるんじゃないかって何だか心配になってきたんだ。でも僕は何も言わなければ何もしなかった。子供ってのはそんなもんなんだ、金色の輪を掴もうとする時にはそれをさせるしかない。何かを言ったりする必要はないんだ。落ちるときは落ちる。でも彼らに何かを言ったりするのは間違いなんだ。

作品の後半でホールデンは妹のフィービーに対して自分は「ライ麦畑の捕らえ人」になりたいのだと打ち明ける場面があるが、そこでのライ麦畑は子供の無垢な世界を象徴していると考えて間違いない。そして彼はその世界に子供をとどめておこうとするのであるが、実は彼自身がライ麦畑に捕らえられていて、大人の世界に羽ばたいていけないでいる。上の引用の場面で、無垢な子供の代表であるフィービーがメリーゴーランドの馬から落ちることは、ライ麦畑の崖から子供が落ちることを意味し、それはすなわち子供が無垢な世界から大人の世界へと落ちていくことを意味している。「落ちるときは落ちるんだ」というホールデンの認識は、子供が永遠に無垢な世界にとどまり続けることは間違いだという認識なのである。

ここでホールデンは、「ライ麦畑の捕らえ人」の英雄になることが不可能であり、かつ間違いであることを認識する。それと同時に子供の無垢な世界にとどまっていたと思っていた自分自身に対しても同じ事が言えることに気づくのだ。自分を含めて独り断ちすべき時に来ている若者がいつまでも子供の世界にとどまり続けるのは間違いだと悟り、ホールデンは自らの手でライ麦畑の無垢な世界に捕らえられていた自分自身を解放するのである。

しかしながら、主人公の少年が自我の確立に成功し大人へと成熟する道が開けたと思わせるようなカタルシス的な描写の後で、その話をしているホールデンが実は精神分析医に向かって話しているという何とも皮肉な描写があるわけで、これをどう受け取っていいのか、あるいはこの描写がなぜ必要なのかという問いが我々に重くのしかかることになる。

ユング心理学を使って『ライ麦畑』に肯定的なメッセージを見出していた私にとってもこの描写はのどに刺さった小骨のようなものであった。それでもやはりこの作品のエンディングは肯定的なものであるという強い印象を拭い去ることは出来ず、私はこの描写を大して意味のないものと判断した。サリンジャー研究の第一人者であるウォーレン・フレンチ (Warren French) も『サリンジャー研究』(J. D. Salinger) の中で同じ問題にふれ、次のように指摘している。

この本の結末でホールデンは精神分析医に掛かっていることを認めているが、彼の衰弱は明らかにただ単に、あるいは基本的にはと言ってもいいのであるが、精神的なものではない。彼は肉体的に病んでいるのだ。彼は一年で背が6センチ半も伸びて、「ほとんど結核に罹っている（8頁）」。「彼はまた「ひどく痩せていて」、肥るために摂らなくてはならない食事療法に従っていない（140頁）」ことも認めている。彼は、最も細やかなケアをしないと肉体が今経験している変化に対処できないような、思春期の中でも肉体的に最も難しい時期の真っ只中にいるのである。（French 108）

私もフレンチ同様、ホールデンが物語の後半において肺を患っているという描写がしばしば出てくるので、彼はおそらく一連のニューヨークでの放浪を終えた後肺病にかかり、その療養のために病院に入っていて、その病院にいるカウンセラーに対して気楽に自らの経験を語っているのだらうという結論に落ち着いたものの、この問題はその後もずっと私の気がかりなままであった。

もっと言うと、その気がかりはこの描写のみから来るものではなかった。サリンジャーの他の作品では明らかな自我の敗北、つまり大人へと成長するプロセスにおける挫折が描かれているものも多く、『ライ麦畑』以降の作品でも成熟した大人の姿が描かれていることはほとんどない。もし『ライ麦畑』でサリンジャーが自我の確立の問題を克服できていたのなら、なぜその後の作品でサリンジャーは、大人へと成長すべき時に来ているのに成長できず苦しんでいる若者の姿を何度も何度も描く必要があったのだろうか。

つまり、もし若者がこの作品に魅かれる理由が、そこに大人へと成長する上で自分たちが見習うべき模範例があるからだとするならば、『ライ麦畑』における若者の成長へのプロセスの成功例はもっと明確に描かれる必要があるし、『ライ麦畑』以降の大人になりきれない若者の姿がなぜ描かれなければならないのかの理由も全く分からないのである。それで私は多くの読者同様に、『ライ麦畑』には前向きな内容が描かれているので価値が見出せるものの、『ライ麦畑』以降の作品については、成熟できない人間の挫折しか描かれていないので価値のないものであると結論づけるしかなかった。

バラシュは『マダム・ボヴァリーの卵巣』(*Madame Bovary's Ovaries*)の中で『ライ麦畑』を実際に進化心理学的観点から解釈している。彼らが注目するのは「親子間対立」(“Parent-Offspring Conflict”)の問題である。この問題は進化心理学では中心的に扱われる問題の一つであり、親子に関する多くの様々な現象がこの進化心理学の理論によって説明されている。そしてそのバラシュの解釈には、今まで私にとって謎であった『ライ麦畑』のエンディングにおいてホールデンが物語を精神分析医に語っているという問題、さらに『ライ麦畑』において一度克服したはずなのにその後の作品において再び大人へと成熟しきれない若者の姿が描かれているという問題への答えが提示されている。

II

バラシュの解釈を検討する前にまず進化心理学が明らかにしている親子間対立の問題を理解しておく必要がある。ピンカーは『心の仕組み』(*How the Mind Works*)の中で次のように親子間対立の問題を説明している。

家族の心理に遺伝子が影響を及ぼしていることを明らかにしたのはロバート・トリバース (Robert Trivers) であるが、進化論的観点から見ると、遺伝子にとって一番大切な生存と繁殖と家族関係との間には次のような関係が成り立つ。次世代に遺伝子を多く残すには多くの子供を送り出すことが必要であるが、生まれたての個体は大人に比べてか弱く、生き延びられないことも多く、親はある選択を迫られる。出来るだけ子供の世話をして子供が生き延びる可能性を大きくしてやるか、出来るだけ多くの子供を作って子供たちに自分で自分の面倒を看させるかの選択である。鳥類や哺乳類の生物は前者を選択しており、よって人間も前者を選択している。とはいえ、親としても永遠に子供の面倒を看続けるわけにはいかない。なぜならある程度成長すると子供も一人で生き延びていく能力を備えてくるわけで、そうなる親としては、次の子供を産み、その世話をするほうにエネルギーを使う方が後世に遺伝子を残す上でより有利になるからだ。

親からすると、それぞれの子供には自分の遺伝子の50%が受け継がれてい

るので、当然のことながら全ての子供に対して平等に投資することになる。しかし子供の立場からすると、その子供は、他の血のつながった兄弟とは50%の遺伝子を共有しているものの、自分自身とは100%を共有しているわけで、他の兄弟が受ける利益が自分にかかるコストの2倍を超えるまでは親は自分に投資し続けるべきだと考える。つまり遺伝子の利害が原因で、親は全ての子供に平等に投資しようとするが、どの子供も親が与えようとする投資よりも多くの投資を求めるわけである。これが親子間対立の問題である。

親子間対立は実は母親の子宮の中から始まっている。子を宿した女性の胎内で、胎児は母親の体の栄養分を次の子供を作る能力を犠牲にしてまで全て摂り尽くそうとする。それに対抗して母親は次の子供のために体を守ろうとする。

この対立は出産の後も続く、母親はまず生まれたばかりの子供を死なせるかどうかの決断をするのだ。嬰兒殺しは世界中の文化で見られる。進化論的に見るとそれは一種の自殺行為のように見えるが実はそうではない。生まれた子が死ぬ見込みが高い時には、他の子供や次の子供のために、状況がよくなるまでエネルギーをとっておいた方がいい。

世界の様々な文化の中で女性は、子供の生き残る可能性が低い状況下では子供たちを殺してきた。その子供が奇形であったり、双子であったり、父親がいなかったり、その女性の夫ではない男の子供であったり、そしてまた母親が若かったり（再び子供を産めるチャンスがある）、社会的なサポートがない時、子供を産んで間もないのに子供が出来た時、先に生まれた子供が大きな負担になっている時、そしてその他の絶望的な苦境、例えば飢饉などに陥った時にはそういう選択をしてきたのだ。現代の西洋における嬰兒殺しも同じである。統計によると、子供を死なせる母親は若く貧しく未婚である。（Pinker 443-444）

子供の方も唯一の武器であるかわいらしきで対抗する。母親に笑いかけ、目と目を合わせ、話しかけに耳を澄まし、母親の表情を真似する。この神経系がきちんと機能しているというメッセージは、母親がその子を生かしておくかど

うかの決断に有利に働く。

ピンカーは、親子間対立の理論はフロイトのエディプス・コンプレックスに代わるものになると言う。エディプス・コンプレックスとは、男児が母親と性的関係を持ちたいという願望を持ち、そのライバルである父親を殺したいという無意識の願望を持つものの、肉体的には強靱な父親にかなうわけがないので、父親に去勢されるのではと恐れるという仮説である。同様に女兒の場合は、父親との性的関係を持ちたいと望むエレクトラ・コンプレックスを持つとされる。一見奇想天外に思えるこの理論も、19世紀後半から20世紀のかなり長い期間において精神分析において有力な理論として受け入れられてきた。

しかしピンカーによると、親子間対立の理論ではもっと明確な説明が出来る。父親が母親に強い関心を持つと、母親が子供に注意を向けなくなってしまう。弟や妹が出来てしまう可能性も高まる。それを避けるために子供が母親の性的関心を減らし、父親を母親から遠ざける戦術を進化させた可能性は十分にあるとピンカーは言う。「この理論は、いわゆるエディプス的な感情が男の子同様に女の子にも共通するものである理由を説明できるし、また小さな男の子が母親と性交したがるというばかげた考えを斥けることも出来る (Pinker 446)」。

さらにピンカーは親子間対立の理論によって覆される考えがもう一つあると指摘する。それは、赤ちゃんが本能の塊で、親がそれを社会化し、社会に順応した一員に育てるという考えである。この考えでは、子供の人格は発育期に子育てによって形成されるということになる。さらに親と子はどちらも、子供が社会環境の中でうまくやっていくことを望んでおり、子供の社会化は両者の利益が合致するところだということになる。

しかしながら親子間対立の理論に従えば、親は子を社会化するにあたって必ずしも子供の利益を気かけるとは限らない。親はしばしば子供の利益に反した行動をするし、また子供がその子供自身の利益に反した行動をするように仕向けることもあるはずなのだ。それぞれの子供が自分の兄弟に対して、その子供が望む以上に利他的であることを親は望む。兄弟が受ける利益がその子供の払うコストを上回れば、子供の利他的行動は親の利益になるからである。しかしそれぞれの子供も次第にそのような親のもくろみに気づき始めるだろうから、

たとえ親の褒美や罰や手本や勧告に最初は大人しく従うとしても、それは彼らが幼く選択肢がないからで、大人になるにつれてこのような親の身勝手な戦術によって自分の人格形成がなされるのを許すはずがない。

III

バラシュは『マダム・ボヴァリー』の中で『ライ麦畑』について親子間対立の理論から解釈を行っている。まずバラシュは、親が子供を自分たちに都合のいいように操ろうとすると、子供はそれに反抗しがちであるし、また反抗する仲間の姿を見て好意的な反応をするものであると指摘した上で、これが『ライ麦畑』が若者の間でその本来の文学的価値以上に人気が出た理由であろうと言っている。

確かにこの作品はティーンエイジャーの反抗の時代に生まれた。1950年代以前には真の意味での「ティーンエイジャー」の概念はなかった。その頃に初めてアメリカのティーンエイジャーは自らのアイデンティティーを求め始めたのだ。それはまたロックンロールや若者独特のファッションの時代であり、ジェームズ・ディーンやマーロン・ブランドといった若い俳優が大スターになった。それは世代間ギャップの幕開けであり、ホールデンはそんな時代の若者のスポークスマンであったのだ。

『ライ麦畑』は確かに時代や地域を越えて若者の間で人気がある、逆に言うと、若者ではなく成熟した大人にはあまり受けがよい。『ライ麦畑』は多くの若者によって読まれてきたが、大人になった後もそれを読み続ける読者は少ないように思う。『ライ麦畑』は若者のバイブル的作品であるが、いずれ卒業しなければならぬ作品でもあるという印象持っている読者は多いと思う。バラシュの指摘はそのあたりの事情をよく説明してくれる。

かつて私は『ライ麦畑』の中でホールデンが自分の父親に対して不満があるにもかかわらず面と向かって反論する機会を一度も持たないことに注目し、これが、彼が神経症的になっている決定的な原因であると考えていた。彼は父親に対してとてつもない不満を持っている。彼の親は、親にとって理想的だと思

うような将来の進路にホールデンを導こうとするが、彼には彼の考えがあり、親によって勝手に生き方を決められることに我慢できない。にもかかわらず、ホールデンの父親の姿は一度たりとも小説中に出てくることはなく、ホールデンと彼の父の対決は描かれないまま物語は幕を閉じる。

バラシュに言わせるとそれはもっともなことらしい。「親よりも子供の方がより小さく、弱く、お金もなく、経験も浅いことを考えると、そういう場合には親子間対立が一連の戦術的撤退という形をとり、全面戦争というよりはゲリラ戦術という形をとることももっともなことだと言える (Barash 193)」とバラシュは言う。ホールデンの親があまりに強すぎる親だったのか、あるいは彼が弱すぎるのか、どちらなのかは分からないが、父親との全面戦争を避けることが彼にとってもっとも効果的なやり方だったのだろう。そのように考えると、ホールデンのような他人に依存するタイプの読者にはその描写は訴えるものになるのかもしれない。しかし全面戦争を辞さない強いタイプの読者にはただフラストレーションを与えることになるのではないだろうか。このあたりが『ライ麦畑』をめぐる評価の分かれ目になっているのかもしれない。

大人の世界はホールデンにとって絶え間ない争いの源である。大人の世界が彼を疎外させ、彼は理解されることもなく、深い孤独に追いやられる。親子間対立の理論における生物学的な考えは実はより広範な大人と子供の対立にも関係するとバラシュは指摘する。つまり、全ての若者と彼らが涉り合っていくのを学んでいかねばならない大人の世界との対立でもあるのだ。大人の世界とうまく涉り合っていくためには、子供は自分の親と、時には歩調を合わせ、時には対立しながら、デリケートな関係を保っていかなければならないが、残りの大人の世界とはもっと危険なやりとりをしなければならない。大人の世界は、新入りを競争相手、あるいは利用すべき相手、あるいはその両方として見ている。若者が、無防備であるがゆえに、疎外感を感じ、用心深くなるのも無理はないとバラシュは言う。

ホールデンはただ一人心が許せる妹のフィービーから、お兄ちゃんには何一つ好きなものなんてなくて周りの全てが嫌いなんだと責められた時、そうではないのだと反論し、自分は、子供たちが遊んでいるライ麦畑で、そこから落ち

そうになる子供たちをつかまえる「ライ麦畑の捕らえ人」になりたいのだと打ち明ける。

Anyway, I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids, and nobody's around—nobody big, I mean—except me. And I'm standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to go over the cliff—I mean if they're running and they don't look where they're going I have to come out from somewhere and *catch* them. That's all I have to do all day. I'd just be the catcher in the rye and all. I know it's crazy. (Salinger 224-225)

ともかく僕は子供たちがみんなこの大きなライ麦畑の中で何かゲームをしているところを思い浮かべるんだ。何千という子供たちがいてね、辺りには誰もいないんだ。大人は誰一人いないんだよ。その僕以外はね。そして僕はすごく急な崖の端に立っているんだ。僕がしなきゃならないことは、子供たちが崖から落ちそうになると捕まえてやることなんだ。子供ってのは走っている時には前を見たりしないから、僕がどこからか出て行って捕まえてやらなきゃならないんだ。一日中僕はそれだけをしてる。僕はライ麦畑の捕らえ人になりたいんだ。バカみたいだってことは分かってるけど。

この場面に関してバラシュは、「ホールデンはおそらく捕まえられたい、そして守られたいのであり、子供たちを捕まえたり守ったりするのは幻想に過ぎないのだ (Barash 195)」と鋭く指摘しているが、これは全克的を射ている。彼は子供たちを無垢な世界にとどめておきたいと思っているが、実は自らが無垢な世界にとどまっていたいのである。

バラシュは続いて「ホールデンは自らの崖から落下している。その落下は、大人の社会からすればある種の勝利である。なぜならホールデンは自らの物語を精神病院の中から語っているのだから (Barash 195)」と指摘する。さらに

続けて、『ライ麦畑』が魅了してきた多くの読者のほとんどがティーンエイジャーであるが、ホールデンが、嘘をつき、何事も成し遂げることなく中途半端で、誰かと理解し合うこともない、周りの人々を容赦なく非難する間抜けであるにもかかわらず説得力を持って若者に語りかけることが出来たのは、彼が崖から落ち、大人の世界に敗北を喫したためであると指摘する。

ほぼ間違いなく、このためにホールデン・コールフィールドはかなりの説得力をもって若者に語ることが出来るのだ。彼が自分の教師の一人に言っているように、彼は自分が人生の反対側に捕えられていると感じており、彼の物語は仲間を見つけようとするほとんど半狂乱で絶えず失敗を繰り返している試みであったのだ (Barash 195)。

つまりもしホールデンが無事に大人へと成熟できていたならば、これほど彼の語りは若い読者にアピールしなかったとバラシュは言っているのである。もし大人へと成熟できていれば、若者からするとホールデンは大人の世界の一員であり、そんな大人は彼らの敵だということになってしまう。

バラシュは『ライ麦畑』が若者の間で人気があるのは、親子間対立の理論に明らかなように、親と対立してしまう若者が、親に対して反抗する若者を目にして好意的な反応を示すからだと言っていた。そしてその若者へのアピールは、ホールデンが大人へと成熟するのに失敗したことによってさらに強力になるわけである。始終『ライ麦畑』に批判的なバラシュは最後にこう締めくくっている。

ホールデン・コールフィールドは、必死になって子供時代の無垢を凍結してしまうことによって、大人の世界による汚染の影響から子供の無垢を守ろうとした。それと同時に、必然的に大人の世界がやむをえずもたらすことになる対立から彼自身をも含む子供たちを守ることになる。しかしながら親子間対立は、人生において不慮の事故が必ず起こるように、絶対に起こるのである。それゆえにほとんど全ての成長の物語は、親やその他の

「権威的な人物」とのある程度の反抗、不満、争いを伴うことになる。
(Barash 195)

バラシュは、親子間対立という問題は決して避けることの出来ない問題であるにもかかわらず、『ライ麦畑』においては逃避しか描かれておらず、それゆえに逃避したい読者はこの作品の中にシェルターのような居心地の良さを感じていると考えているようだ。親子間対立は決して避けることの出来ない問題だという点には私も同意するし、親子間対立の全面戦争が描かれていないことにも賛成する。しかし私は親子間対立への解決となる糸口がこの作品には描かれていると考えている。上で引用したホールデンが雨にぬれながらメリーゴーランドに乗っているフィービーを見て「落ちるときは落ちるんだ」と悟る場面は、間違いなく彼の中で古い自我が壊れ、新しい自我として生まれ変わる描写だと解釈できると思うからだ。

結局のところ、バラシュの解釈は、『ライ麦畑』の読者に対して、ファンタジーの世界から抜け出して早く現実の世界に戻りなさいと呼びかけているように聞こえる。はたしてそうなのであろうか。この作品はただ心地よい若者のシェルターなのだろうか。それとも私が考えるように、現実世界へ適応することを促す、前向きな教訓を備えた物語なのだろうか。

IV

文学の目的とは、かつてホラティウスが言ったように、喜びと教訓を与えることだとピンカーは言う。「なぜ人はフィクションを楽しむのか」という問いは「なぜ人は人生を楽しむのか」という問いと同じであると。教訓については、文学は我々に、人生における様々な場面をシミュレーションする機会を与えてくれるのだとピンカーは言う。我々は、数多くのシミュレーションを経験することにより、実際にそれに近い状況に陥ったときに、より間違いの少ない行動をとることが出来るのだ。ピンカーは『心の仕組み』の中で以下のように説明している。

フィクションの世界がいったん作り上げられると、その主人公には目標が与えられ、我々はその主人公が障害に立ち向かってその目標を追う様子を見つめる。……フィクションの世界の登場人物は、我々の知性が現実世界の中で我々に許すような行動と全く同じ行動をとる。我々は彼らに何が起こっているのかを目にし、彼らが目標を追う際に使っている戦略や戦術を心にとめるのだ。

その目標とは何なのだろうか？　ダーウィン主義者なら究極的には生物はたった二つの目的しか持っていないと言うだろう。生存と繁殖だ。そしてその二つがまさにフィクションの中で人間という生き物を動かしている目的なのである……。

人生にはチェスよりも多くの指し手がある。人々は常にある程度の対立関係の中におり、彼らの指し手やそれに対する対抗手段は想像を絶するほどの膨大な相互作用の組み合わせへと増大していく……。

フィクションの物語は、我々が将来出遭うかもしれない運命を決するような難問や、そういう状況で我々が使うかもしれない戦略の結果を取り揃えた心のカatalogを提供してくれる。……人生は芸術を模倣するという決まり文句は真実である。なぜならある種の芸術の目的というのは、人間がそれを模倣することにあるのだから。(Pinker 541-543)

文学の目的は喜びと教訓であるというのが進化心理学からの一つの結論であるでしょう。では『ライ麦畑』におけるホールデンの姿に自分たちのスポークスマンとして好意的な反応を示す若い読者たちはこの作品から喜びを得ているのだろうか、それとも教訓を得ているのだろうか。

ホールデンが永遠のピーターパンであることを選んだというバラシュの説では、この作品には若者にとって反面教師として以外に教訓的なものは見当たらないということになる。それどころか子供の世界にとどまり続けようとする子供たちは、子供たちの世界を守り続ける「ライ麦畑の捕らえ人」としてのホールデンにずっと擁護し続けてもらえるわけであり、そういう観点から見ると、どちらかと言うと、この作品には喜び、別の言い方をすると、快樂の要素が強

いように思われる。

しかし私は前にも言ったようにこの作品に前向きな解決が描かれていると考えている。メリーゴーランドの場面でホールデンがいたる認識、いつまでも子供の世界にとどまり続けることは間違いなのだという認識は若者にとって、大人へと成長するための偉大なる教訓であるはずなのだ。その教訓ゆえに数あるサリンジャーの作品の中でも、この作品は他の作品に抜きん出て極めて高い評価を得たのだ。事実サリンジャーの他の多くの前向きな解決が描かれていない作品は決して高い評価を得ることはなかった。しかしながら残念なことに、『ライ麦畑』の教訓の部分は快楽の部分にかなり埋もれてしまっているという印象が強く残ってしまう。

結局のところ、作品の中に快楽を読み取るのか、あるいは教訓を読み取るのか、そしてそれらをそれぞれどの程度まで深く読み取るのかというのは読者次第なのである。サリンジャーの読者の多くは若者である。そして親子間対立の理論によれば、親と子供の利害はしばしば衝突する。そしてバラシュも言っていたように、親と子供では力関係でいうと、明らかに親の方に分があるので、子供のほうは全面戦争を避けゲリラ的な戦略を使う。ピンカーは、自分の子に気をかける親の親心を利用することにより、子供は親が与えたいと思っている以上の世話を得ようとするのだと指摘した上で次のように言っている「親の側も嘘泣きを見極められるよう進化しているはずなので、赤ちゃんの最も効果的な戦術は、たとえ身体的にその必要がなくても本当に悲しい気持ちになることなのである。自己欺瞞は早い時期に始まるのかもしれない (Pinker 445)」。

自己欺瞞に陥った子供たちが、一方的に自分たちが正しいと信じ込んだ結果、手放して子供の側に立って子供を守ってくれるホールデンの姿を見て、この人なら自分の全てを受け入れてくれると思ったとしても不思議ではない。これはある意味で皮肉である。なぜなら『ライ麦畑』は長い間、社会や大人の欺瞞を暴く純粹無垢な少年の物語と捉えられてきたからだ。しかし実際は少年自身も欺瞞に満ちているわけで、そこにあるのは、社会や大人の欺瞞と少年の欺瞞との壮絶な生存競争だということになる。

自己欺瞞とは、ピンカーによると進化の産物であるわけだが、当然のことな

から自己欺瞞が行き過ぎると真実が見えなくなってしまう様々な弊害をもたらすことにもなりかねない。ピンカーは次のように言っている。

とはいえ、我々の心が複雑に出来ているおかげで、我々は自分自身の詭弁にいつもだまされているわけではないのだ。心は多くの部分からなり、一部は美德のためにデザインされ、一部は理性のためにデザインされている、さらにそのどちらでもない部分を出し抜くのに十分くらい利口な部分もある。ある自己が別の自己をだますことはあるかもしれないが、時折第三の自己が真実を見ているのだ。(Pinker 424)

確かに若者にはシェルターが必要なかもしれない。ある程度の力を蓄えるまではそのシェルターで休息をとることも必要なであろうが、永遠にシェルターにとどまり続けることは死を意味することも事実である。自己欺瞞から逃れ、ピンカーの言う「真実を見る第三の自己」からこの作品を読んだ時、この作品の前向きなメッセージを読みとることが出来るのだ。そしてその前向きなメッセージこそがこの作品の最大の価値なのである。

結論

偉大な文学作品にはよくあることであるが、『ライ麦畑』は常に二つの解釈に引き裂かれてきた。前向きな物語なのか、それとも現実逃避の物語なのか、批評家の意見は分かれてきたし、今後も決着がつくことはないだろう。

しかし心理学の比較的新しい流れである進化心理学の観点から見ると、今までは見えてこなかったことがこの作品の中に見えてくる。親子間対立の理論によると、遺伝子の利害が原因で、親は全ての子供に対して平等に投資しようとするが、どの子供もそれ以上の投資を求めてしまうという現象が起こる。さらに、親は子供を社会化する上でしばしば子供の利益に反した行動をとることになるのだが、子供の側としても、最初は大人しく親の言い分を聞くものの、いずれその目論見に気づき、親の戦術にいつまでも従うようなことはなくなるの

だ。

バラシュは『ライ麦畑』が若者に広く支持されたのは、そんな親子間対立における子供の側の反抗が描かれているからだという。大人より実社会で不利な立場にいる若者は、大人へと成長する際、親と、あるいは周りの大人とデリケートな関係を築いていかなければならない。全面戦争などは論外で、ホールデンがしたようにゲリラ戦術をとって、ひたすら疲弊していくような戦いを強いられる。バラシュはエンディングにおいてホールデンが精神分析医に語りかけられているという描写を大人の世界に対する敗北と捉え、その敗北ゆえにこの作品は若者に支持され続けているのだと指摘している。

進化心理学的観点から見た文学の目的とは喜びと教訓を与えることだとピンカーは言う。バラシュの説では、若者はこの作品の中に逃げ隠れできるシェルターを見出しているということになり、教訓的な意味合いはあまり見出せない。しかし私は、ホールデンがメリーゴーランドに乗るフィービーを見守る場面に前向きなメッセージが描かれおり、この教訓がこの作品を大きく価値あるものになっていると考えている。

ピンカーによると自己欺瞞も進化の産物の一つだということになるのだが、自己欺瞞に陥った若者にとっては、この作品の中に、大人の世界からの現実逃避という後ろ向きなメッセージしか読み取れないかもしれない。しかしピンカーの言う「真実を見る第三の自己」の視点からこの作品を見る時、この作品が伝えようとしている前向きで教訓的な真のメッセージを読み取ることが出来るのである。

Works Cited

- Barash, David. P., and Barash, Nanelle. *Madame Bovary's Ovaries: A Darwinian Look at Literature*. New York: Delacorte Press, 2005.
- French, Warren. J. D. *Salinger*. 2nd ed. Boston: Twayne, 1976.
- Pinker, Steven. *How the Mind Works*. New York: W. W. Norton, 1997.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Boston: Little Brown, 1951.